

大阪・関西万博開催に向けた御意見

御所属 株式会社 studio-L 代表取締役

御名前 山崎 亮 様

1. 2025年の大阪・関西万博に何を期待しますか。

(是非すべきこと、また、するべきではないこと、後世に残すべきもの等)

【デザイナーについて】

- 関西のデザイナーが活躍する場づくりが大切だと思います。前の大阪万博の際、結果的に東京のデザイナーが乗り込んできて重要な部分をデザインしたという経験は、「いい万博だった」という人々の印象を高めることに貢献したものの、関西のデザイナーたちからすると「関西のデザイナーには任せておけないからな」という東京目線の負のレガシーを残してしまいました。
- デザイナーの実力という部分で東京と関西を行き来していると思うことは、東京に9割マスコミがあり、東京周辺での取材が行われていることから、東京を拠点に活動しているデザイナーが有名となっています。ただし、必ずしも有名な人が実力がある人だというわけでもありません。今回の万博では関西のデザイナーをどのように認識し参画してもらうか。関西にも実力のあるデザイナーがいるということを確認し、調べ、参画を呼び掛けていただきたい。
- 大切なことは結果ではなく、かといってプロセスだけでもありません。しかるべきプロセスを経ること、その結果が魅力的なものになること。その両方をしっかり調整できるプロデューサーの存在が求められると思います。果たして、いまそんなに腰を据えて物事を考えることができる人がいるのかどうか。また、そうした時間を確保する政治力を持ったプロデューサーが存在するのかどうか不安です。

【市民について】

- 徹底した市民参加を試みるべきだと思います。専門家が集まって最先端の理論や技術を駆使し、市民は単なるお客様になればいいんだというメッセージだけを残してしまう万博にすべきではないと思います。
- 高度成長時代の万博は住民参加などにじっくり取り組む余裕はありませんでした。しかし、人口が減少し、開発圧が相対的に低くなった時代における万博は、早くから計画的に住民の関与や参加を進めていくことができるはずで、そのプロセス自体が、新しい時代の都市づくりやまちづくり、プロジェクトの進め方を示すことになるだろうと思います。
- つまり、今回の万博は会場で目にするだけでなく、そのプロセスをしっかりと発信することで世界中の人が学ぶことができるものにするべきです。「ネットで見聞きすることができる時代に万博なんてやる意味あるの?」という問いに対する僕の答えは、結果だけ展覧するならネットではほぼOK。だけどプロセスを発信し続けて、そのプロセスの結果を体感しにくるのであればやはり万博会場が必要になる、というものです。
- どれだけの住民が学んだのか、学んだ住民がどんなつながりをつくったのか、その人達が何を始めたのか、どんな表情で活動しているのか、万博以後にもそれがどう発展していくのか。そういうことを体感しにくるのが万博会場へくるということの意味でしょう。
- 「二度目の大阪万博が、日本の住民参加の方法を一気に変えてくれたよね」と人々が語り継ぐような画期的なプロセスをデザインすることができるかどうか。住民や企業や行政がうまく協力しながら、有権者であり消費者であり生産者でもある住民がしっかりと参加する万博のプロセスをデザインすることが重要であり、それこそが無形のレガシー形成につながる行為

だと思います。模造紙と付箋を使うワークショップを繰り返して、人々を「ワークショップアレルギー」に陥れることは避けたほうがいいと思います。

【その他の重要なキーワード】

- 住民が真剣に学び合い、話し合い、決定し、動き出せば、その他の重要なキーワードはすべて出てくるだろうと思います。そこはあまり心配しなくてもいい。エコへの配慮、ジェンダーバランス、次世代教育、多様性への配慮など、SDGs的な話題はワークショップでも繰り返し登場します。専門家がそれをすべて決めてしまうのではなく、(結果的に同じだとしても)住民たちが話し合って方向性を少しずつ決めて、決めたからこそ自分たちも動き出すという機運を高めるような進め方が必要だと思います。

2. 大阪・関西万博で見せるべきコンテンツは何でしょうか。

(例：最先端技術の実証、SDGs 達成への貢献、ライフサイエンス分野との連携等)

- 超長寿社会を経験する日本だからこそ、医療や福祉や介護についての技術や地域包括ケアや地域共生社会の実現に向けた取り組みなどを世界に示すことができるだろうと思います。それは日本の強みでもあり現状でもあり、日本が取り組むべき大きな課題でもあるでしょう。特に、最先端技術だけで超長寿社会を乗り越えようとする、またしても「専門家にまかせておけばいい」「ロボットがやってくれるから大丈夫」という「お客さん国民」を増やすだけになってしまいますから、市民も自ら動き出し、自分たちが望む未来は自分たちで実現させていくんだという気概を醸成する万博にすべきだろうと思います。
- これは世界に示すのが難しい無形の資産ですが、人々の志というか活動というつながりというか、そういうものをうまく示すことが重要でしょう。テクノロジー自慢大会ならウェブ上でやればいい。そのために万博はどうあるべきか、どう見せるか、どう体験してもらうか、何を感じてもらい、何を考えてもらうのか。悩んでもらうのか。そのきっかけをつくりだすことが求められている気がします。
- 高齢者や障害者だけを施設に閉じ込めて、最先端の技術で「生活を支える」なんてことをやるのは、本人たちの人生を楽しくしませんし、介護保険も医療保険ももうパンクしそうなのだから、そんな方向に僕らの未来があるとは思えないのです。万博は技術や芸術を見せつけるものとして理解され続けていますが、専門家がそれを見せれば見せるほど市民は感動し、未来を夢見るのだけど、その裏側で「専門的なことは専門家にまかせておけばいいんだ」「素人の自分には無理な分野だな」という意識を植え付けることにもなっています。この「目に見えない副作用」のほうを今回の万博はどう考えるのか。そこがとても重要です。

3. 会場計画及びインフラ整備について、新たなアイデアや御意見をお願いします。

(例：会場のデザイン、水面や緑地の利活用、待ち時間のない万博とするための手法、災害対策、暑さ対策等)

- 1980年代は「アメニティ豊かな空間」という表現で、木々により日陰を確保したまち、気温を下げる循環機能をうたった設計など、美しいまち、きれいなまちが主でした。現在は、公衆衛生と都市設計が合わさり、住めば健康になる都市というまちづくりが注目を集めている。無意識のうちに長めに歩きたくなるような都市の設計などが模索されています。こういったヘルスケア、健康促進の視点を含めた会場計画が望ましいです。

4. そのほか、御自由に御意見をお願いします。